

八戸城下の奥浄瑠璃——新史料紹介——

近世年間、奥浄瑠璃（奥節）が人々にこよなく賞玩されていた様相を伝える記録として本史料の右に出るものはあるまい。その史料の名は、『遠山家日記』（百十一冊）。八戸藩の上級武士・遠山家の四代にわたる当主が寛政四年（一七九二）から百二十七年間にわたって書き継いだ日記である¹⁾。

〈八戸藩（二万石） 寛文四年（一六六四）に成立。〉



近世、領内（総人口約六万人）には凡そ三百人を越えるボサマ（座頭）とイタコ（神子）がいた。奥浄瑠璃については松尾芭蕉をはじめ高山彦九郎・式亭三馬・菅江真澄などの記録が知られている。しかし、これらはいくまで断片的の記事であり、永続性のある在地史料ではない。拙稿では、この史料を通して領内および城下の人々の日常生活の中に「奥節」がどのように根付いたか、人々にいかに豊穰なる言語表現を提供していたかを紹介したい。

八戸藩日記 まず、藩の公式記録²⁾にみえる代表的な盲僧・浄瑠璃の關係記事を紹介しよう。

・宝永六年（一七〇九）二月二日 晴（将軍逝去ため鳴物停止、座頭渴命）

一、当所座頭共鳴物御停止ニ付 及渴命候段申上候処 此御時節候へ共 御内意にて上留り斗ハしのひ二語可申 小うた等うたひ申間敷旨 森十兵衛へ被仰渡候

阿部 幹男

・享保九年（一七二四）正月十七日の条（城中操人形見物）

一、御操被仰付 御年寄中御役人 并御年寄中御用人御番頭 同並何茂妻子見物仕候様 被仰付 罷上御料理御菓子等被下之

・延享元年（一七四四）六月廿五日の条（宗門改惣人数）

一、当子ノ年宗門改惣人数左之通 一 中略 一
六万四千四百拾六人 内 男 三万七千四百拾八人 女 式万六千四拾三人 右之内 僧 百八拾老人、座当 百六拾老人、ごぜ 百三拾三人、右ハ御領内惣人数 御内高共 二 公儀エ御書上人数左之通

・寛保三年（一七四三）十一月五日の条（座頭惣録御機嫌伺）

一、久保沢匂当儀 御新屋敷エ御機嫌伺之儀 一ヶ月一両 度宛罷上り候様被仰付

【遠山家日記】 公式記録を踏まえた上で、『遠山家日記』から巫

覘・首僧関係史料を抽出分析し、大きく次のように分類した。

①当主が二代（平馬・屯たむろ）五十年にわたり、度々寺社町奉行を務めていたため、職務上かれらとの関わったことを記した記事。

・文化二年（一八〇五）二月一日 晴（座頭総録、寺社町奉行就任祝に参る）

一、今晚座当総録葉惠都、御役成爲祝儀罷出、尤酒式升二式十疋持参、妻方江メたはこ五メ参、吸物酒夜食うんとん

差出

・文化三年（一八〇六）正月六日 晴（年頭の寺社奉行）

一、今日寺院御礼日付六時罷上、御礼無滞相済
一、寺院 到来左之通

一、扇子箱 南宗寺・大慈寺・法光寺・禅源寺・对泉院・来迎寺・長流寺・広沢寺・本寿寺

一、紙包 豊山寺

一、十疋 名久井淨休寺・是川清水寺・本覚寺・願栄寺・霊現别当定円・小田比沙門别当秀寛・名久井年行事

一、二十疋（座頭）総録 葉惠都

・同年 十一月九日

一、座当総録 此間妻取迎候趣付、為欲樽肴代二十疋差遣

・文化九年（一八一二）五月十九日 晴（総録との話合）

一、今晚座頭総録内用有之罷越、夜食差し出

・文化十一年（一八一四）六月廿二日 曇東風冷（総録死去に付、名代を指名）

一、座頭総録葉惠都病死二付、年行事小野一秀都エ当分総録御用承被仰付、宅江召呼申達之

・文政二年（一八一九）五月二日 晴（端午節供）

一、今夕 豊山寺和尚・仙貞老・元要 并 惣録小野都参、酒差出

②家族の病氣や心身不調の時、巫覘・首僧に祈祷や按摩治療に

依頼した記録。

・文化二年（一八〇五）五月九日 晴（滝都妻、娘の病氣祈禱）

一、お久長々瘡相煩、其上虫二而病身二付、七ツ屋滝都妻
招呼、祈禱取参出申合候、名前つなともらい候事

・文化九年（一八一二）十月七日 晴（イタコの祈禱）

一、妻病氣不宜、昨日より一円眠も無之、はんもん有之二
付、七ツ屋滝都いたこ相頼致祈禱

・文政九年（一八二六）四月十四日 晴（去る三月廿六日石川元
長死去に付）

一、三哥と申すあんま座当、今晚初而相勤

・同年 五月十四日 雨

一、三哥座当、明後日本所エ罷帰候趣二付、錢百文呉ル

・同年 五月十九日 雨

一、座当惣録（は、様御病氣）為見舞参、酒呉

・同年 五月廿日

一、は、様あんま御頼二付、惣録参ル

③年中行事や家の祝事仏事、さらに接待・娯楽に、盲僧や曲師
を招き奥節や浄瑠璃を語らせていた記事。これは遠山家のみな
らず城下の家々で日常茶飯事に行なわれ、さらには藩主や家臣
までともに山伏舞や座頭芝居に興じていた。また、仙台や大坂
の浄瑠璃太夫が城下に来て語っていた。

・文政九年（一八二六）三月廿三日 晴（屯登祝・奥節座頭）

一、今晚屯出立付、朝膳壹汁三菜焼物付、（中略）昼頃より

客来有之付、夕膳壹汁三菜焼物附二而差出、後段吸物二肴
七種ニて酒差出、初登二付奥節座当、森越村細都為呼、壹
曲申付、祝義三百文呉

・文政十年（一八二七）十二月九日 雪壹尺余降（碗飯振舞・座
頭三哥一曲披露）

一、碗飯二付夕膳料理例之通、尤名主共エは焼魚付二而呉
ル、座当三哥参り、一曲申付

・天保三年（一八三二）六月十六日 晴（法事での奥浄瑠璃）

一、（今日玉顔貞樹様）御祥忌日二付、朝膳とろ、汁致候付、
八弥殿、幾蔵殿、相招振舞、昼時より豊山寺様外客来、多
助殿、—中略—市太夫殿御内方被参、吸物酒差出、葛巻よ
り来候座当招、奥浄留理為語ル

・文政八年（一八二五）十月廿七日 晴（奥節振舞）

一、今夕豊山寺和尚振舞二而、座当富之都招呼、奥ぶし承、
元治・はは様・運蔵殿内方・湊家御袋様・軍蔵殿被参、

・同年 十一月六日 晴（奥節振舞）

一、今夕元治方二而 奥ぶし座当振舞二付、七時より罷越、
は、様・屯も参、馳走二相成、夜更け罷帰

・同年 十二月十五日 晴（奥節振舞）

一、今晚運蔵殿二而、根城座当奥ぶし振舞候趣二付、庄右
衛門并屯夫婦罷越、夜更罷帰

・同年 十二月十七日 晴（座頭芝居）

一、今晚清右衛門様二而、座当芝居有之二付、屯夫婦罷越
・文政九年（一八二六）十月十四日 曇（大坂隠居太夫夫婦の
来八。）

一、此節大坂より時休斉と申、浄瑠璃太夫参、廿三日町総
兵衛家にて、昨夜より寄有之、格別上手にて大人之由、尤
大坂二而時大夫と申者、隠居致罷下候由、三味せんハ女房
ひき候由、是も上手也

・同年 十月廿五日 晴（南宗寺にて大坂太夫の上演）

一、今晚南宗寺二而、大坂太夫相召招、湊公・栃内公・世
喜山老・清右衛門様エ御振舞申候付、御同道罷越、尤新兵
衛殿・弥九郎殿御出、治右衛門殿并源右衛門殿も被参、種々
馳走二相成

・同年 十一月廿三日 晴寒気強（八人芸）

一、今晚山崎公二而、御家老中御出、八人芸被召呼二付、
参候様申来、暮頃より罷越

・同年 十二月九日 晴（遠山家碗飯振舞・越後ごぜに常磐津を
語らせる。）

一、右（今日碗飯二）付、客太助殿・運藏殿・幾藏・友治・
幾三妻参、越後より参居候、常磐津語こそ召呼、三百文具、
（後略）

④ 江戸勤番中、非番に浄瑠璃や芝居見物に出かけた記事。

・文政十一年（一八二八）五月十九日 晴

一、今日かわらけ町浄瑠璃へ参

・同年 五月廿日 晴

一、かわらけ町浄瑠璃へ参人参ル

・同年 五月廿二日 昼頃雨降夕方晴

一、今日昼時過より悦太夫殿、新藏殿同道にて、新橋浄瑠
璃へ参ル

・同年 六月三日 晴（数寄屋橋浄瑠璃）

一、今日昼頃より他出致、数寄屋かしお力さん浄瑠璃名人
二付参候、尤、三味は鏡治ト申母、是も名人なり

・同年 六月四日 晴（西久保浄瑠璃）

一、今日八時過より西久保浄瑠璃へ、与藏同道にて参

・同年 六月十三日 雨（赤坂浄瑠璃）

一、八時より悦太夫殿、篤三郎殿同道にて、赤坂辺へ浄瑠
璃へ参候所、休二付戻候

・同年 六月十六日 雨（赤坂浄瑠璃）

一、八時過迄頼男殿、悦太夫殿、篤三郎殿同道にて赤坂浄瑠
璃へ参候処、休二付罷帰

・同年 六月十八日 晴

一、八時より洗湯并髮結へ参、前町浄瑠璃へ参

・同年 六月十九日 晴

一、八時過より土器町浄瑠璃へ参

・同年 六月廿一日 晴

一、髪月代并洗湯へ八時より罷出、帰りかわらけ町浄瑠璃

へ参

・同年 六月廿二日 晴〈三田春日明神社の人形芝居〉

一、八時より三田春日二、人形有之二付見物へ悦太夫殿、与蔵殿同道にて参

・同年 六月晦日 雨夜より風〈芝居見物〉

一、今朝六ツ時過より、昨日申合の人数芝居へ参、暮六ツ時帰

⑤知行地の巫覡・盲僧との緊密な関係を記したもの。

・文化七年（一八一〇）六月四日 晴

一、座当総録、久慈エ罷越候付、拜知へ用向も有之候哉と為見舞罷越

・文政十一年（二八二八）三月廿一日 晴天暖気〈屯登祝に奈恵都参上〉

一、久慈奈恵都罷出候付、為見舞参候付、一曲申付

・天保五年（一八三四）八月三日 晴〈久慈那栄都〉

一、内丸御拜知座当久慈那栄都、先頃より旦那へ罷出居候付、今夕方より拝借致、奥浄瑠璃為語 喜満多様御招申

夜喰差出 両富と申弟子老人召連来、那栄都二三百文呉遣、曾治殿御袋も来

・同年 十二月廿八日 晴〈宗家拜知の座頭〉

一、宋権右衛門殿拜知座当両竹、度々参あんま為取候付、三百文呉遣、外二ば、殿百文、母上様百文呉遣

史料の分析

前述のとおり、近世武士が記した日記に、盲僧や巫覡・浄瑠璃に関する記事がこれほど頻出するのは「松平大和守日記」³以外にあるまい。全国的にも稀有な史料である。

①であるが、文化三年正月六日の条に代表されるように、領内の有力寺院、山伏や座頭総録の寺社奉行への年頭札や就任祝、座頭総録の任命についての記事。豊山寺初め藩内祈祷寺への雨乞い・日乞い・漁乞いなどの執行命令など、また法霊社の祭礼における山伏一統も含めての総括に関するものである。

②は説明を要しない。庄右衛門の妻や娘（お久）が病気とき、七ツ屋イタコが祈祷を依頼されている。彼女は座頭滝都の妻である。息子（幾蔵）のときも秀都イタコが依頼されている。お久は恢復後イタコに端午や年瀬には祝儀を届けている。また、庄右衛門が亡くなる直前まで御代の都があんま治療に専心している。仏事が済むと主を偲ぶかのように訪れ泊まっている。江戸時代をとおして人々の病氣治療や祈祷に、巫覡や盲僧がいか

に深く係わっていたかが窺い知ることができよう。

③は城下の人々の日常生活の中に「浄瑠璃」奥ぶし（奥浄瑠璃）がどんなに根付いたかを記した貴重な記録である。のみならず盛岡藩・仙台藩の盲僧たちも城下を訪れ、各家々の振舞いに招かれて語っている。「奥浄瑠璃」について、これほど量的にも多くの、かつ多彩な記録は非常にめずらしい。惜しむらくは

曲名が皆目記されていない点である。そのため、どんな内容の浄瑠璃を語っていたのか分からない。ただ手がかりがない訳ではない。人々にこよなく賞玩されただけあつて識字層の人々の手によって、語り物が聞き書きされた写本が残されている。いわゆる「奥節写本」である。これについては再度ふれる。

なお、日記の筆者（屯）は「奥節」と「浄瑠璃」をほぼ完全に区別している。「浄瑠璃」は「盛岡」女太夫浄瑠璃有之「仙台下り太夫之浄瑠璃」「大坂より浄瑠璃太夫参、格別上手にて大入の由」とみえる。また、城下の中にも浄瑠璃語りがいた。文政十一年（一八二八）三月二日の条に「ミとや平八、惣兵衛、市兵衛被参、浄瑠璃相催」とみえる。

領内には凡そ三〇〇人を越える盲僧（座頭）とイタコがいたことは前述した。彼らはあるま・針灸・奥ぶし・祈祷・口寄せなどを生業としていた。また、山伏集団同様、総録や年行事がおかれて集団の統括がなされていた。「八戸藩日記」寛保三年（一七四三）十一月五日の条にみえる。久保沢勾当は武家出身ではなかったと推察される。江戸にも度々登り、上納金を納め「勾当」の官位を得ていた。

明暦三年（一六五七）の当道記録によると、全国で座頭以上が二〇五一人。その内「檢校」が九七人、「勾当」が一二九人、残りは座頭である。ちなみに盛岡藩の総人口は約三〇万、三六万人。盲僧は六〇〇〇七〇〇人、ごぜは約四〇〇〇人。山伏・神子約一〇〇〇人、合せると二二〇〇〇人で、八戸藩もほぼ同じ

比率である。盛岡藩にも文化三年（一八〇六）に藩主の親族で梅富という座頭がおり、江戸で修業して官位「檢校」を取得して帰郷、戸沢姓を賜り、百二十石を給されていた例もある。

④「江戸勤番日記」は屯が書き記したものである。彼は文政十一年（一八二八）四月に三十歳で初めて江戸勤番に就いた。江戸は見る物聞く物初めて、さぞ新鮮であったろう。納戸役という比較的楽な職務もさいわいしてか、五月と六月を中心に九月初旬まで、かわらけ町・新橋・数寄屋町・西久保・三田春日と浄瑠璃や芝居見物に十四回も出向いている。六月三日条には「数寄屋河岸お力さん浄瑠璃名人」と完全に魅了されたことを記している。この辺は寛政頃から各藩留守居や魚商を相手に各所に芸者町が立ち、日本橋芸者と並んで数寄屋町芸者として明治頃まで繁昌したところである。翌年正月にも、五日・十三日・十四日十六日・二十日と土橋や伊勢町河岸に四回も通っている。この辺の河岸には全国からあらゆる産物が集荷するところで、「江戸名所図会」にも蔵がたくさん立ち並ぶ様子が描かれている。

屯の二回目の江戸勤番は、文政十三年（一八三〇）四月末から天保二年（一八三一）五月まで。これまた、五月から十二月まで新橋・かわらけ町・木挽町の浄瑠璃や芝居へ通っている。この頃、木挽町（銀座六丁目）は森田座・河原崎座などに芝居小屋で賑わっていた。さらに、浅草観音や水川神社祭礼・新橋松坂野へ参詣や買物にも出向いている。また、十二月と翌四月に、藩邸内で座敷浄瑠璃が催されて家臣一統も見物したこと

も記されている。三回目の江戸勤番は、天保八年（一八三七）十一月から天保十年（一八三九）九月まで。若殿死去と世継ぎ、大飢饉など難題に向合う大役に就き、多忙をきわめるが、養子縁組が一段落着いた二月末には木挽町芝居や新橋加賀町浄瑠璃に向向している。さらに、四月二十五日・同二十七日・五月三日と雑敷人形芝居見物に出掛けている。この雑敷人形芝居とは、この頃江戸で人気を博していた結城座人形浄瑠璃の興行ではないかと察せられる。続け様に向向しているので、かなり気に入っていたのではあるまいか。

⑤「遠山家日記」には「森越村座頭細都」とか「葛巻村奥ぶし座頭」とみえ、領内各地に座頭がいたことを覗える。その中に、しばしば「内丸（中里家）拝知の座頭久慈那栄都、今夕方より拝借致、奥浄瑠璃為語」とか「宗権右衛門拝知の座頭両竹」という記述がみえる。これは拝知はいちの主と座頭との緊密な関係を表していると考えられる。拝知の主は座頭にとって最大の庇護者（パトロン）であった。拝知内の家々の冠婚葬祭に招かれることを保障してくれる主であり、かつ領内を廻るときの保証人でもあった。一方、拝地の領主にとっては彼らの芸を保護することによって拝知の安寧をもたらすと同時に、領内各地から種々情報をもたらす必要な存在でもあった。遠山家は久慈と軽米に知行地をもっていたが、拝知名主の子供たちを八戸の祭礼に必ず招いたり、拝知座頭に合力銭を与えている。さらに、自分の三男（徳邦）を拝知の久慈にある長泉寺に入院させたこともあ

り、強い絆で結びついていた。久慈年行事の山伏・南学院も八戸へ来るときは、必ず遠山家を訪れている。このような両者の関係は、この地方での「奥浄瑠璃」の存続にとって重要な一要因ではなかったと考えられる。このような例は同じく仙台藩でもみられる。『伊達治家記録』元禄十一年（一六九八）九月廿五日条に「高屋快安采地二居る替者玉都二浄瑠璃命セラル」とみえる。仙台藩では知行地を「采地」と呼んでいた。

【奥節の演目】

奥浄瑠璃とは古浄瑠璃の系譜を引く、近世東北地方一帯（主に太平洋岸の諸藩）で流行した語り物文芸のことで、その担い手はボサマ（盲僧）や巫覡（修験・巫子）であった。これが一応の定義であるが、もう少し詳しく説明してみたい。

「古浄瑠璃」といっても近松門左衛門たちが登場するまで約百年間、いろいろと変遷があった。

概括的にのべると、初めは室町時代に流行した軍記物や能や幸若舞、さらにお伽草子に題材を求めた古浄瑠璃や、神仏の由来や霊験譚を素材にした本地語りや説経節（説経浄瑠璃）が行した。代表作は、「八島」「たむら」「常盤物語」、後者は「さよひめ」「信田妻」「山椒太夫」である。つぎに流行したのは金平浄瑠璃である。スーパースター坂田金時の子・金平が縦横無尽に活躍する人形浄瑠璃である。これが衰微すると、王朝風の雅さを取り入れた土佐浄瑠璃がとって替り、この後に近松や竹本が登場して義太夫節の全盛時代を迎えることとなる。

奥浄瑠璃は、これらとの密接な交流から生まれた。では具体的にどんな物語が、どのように語られていたものか。『遠山家日記』には曲名を覗える記事は一切みえない。しかも日記の記述は近世に入り、すでに二百年以上も経過した寛政四年に始まっている。しかし残されている写本群から、近世初期の古浄瑠璃およびそれ以前から語り継がれた東北地方の霊山・霊地の由来譚が古浄瑠璃風に改編されて語り継がれたのが、「奥浄瑠璃こと奥節」といえよう。

その代表的な演目が『尼公物語』と『十和田山本地』である。前者の原曲は古浄瑠璃『八鳥合戦』⁽⁴⁾であるが、近世中頃にはこの演目は三都では廃曲となっている。ところが仙台地方はもちろん八戸付近でも明治頃まで語られていた。義経一行が山伏姿になって奥州に落ち往く時、信夫の佐藤庄司屋形に宿をとり、主の尼公に乞われて尼公の息子嗣信・忠信の最期の様子を語る浄瑠璃である。八戸付近で語られた徴証は、宗家文書の中にある『尼公物語』⁽⁵⁾の写本から覗える。この写本は余所で収集されたものではない。この地方で書写された奥節写本である。なぜなら義経一行が、佐藤庄司の屋形を訪れた時に「我々は」四国の客僧で、南部の峰に結縁のため出羽の羽黒へ参る途中」と語らせているからである。さらに「尼公（秀衡の妹）の二人の娘は、それぞれ和泉三郎と南部殿へ嫁がせた」と語っていた。何ゆえ「南部の峰」とか「妹婿南部殿」と語るのか。言わずもがな、この地方の人々の前で語っていたからである。（後者は割愛）



*権現さま（慶長十三年銘）

（一六〇八）銘の獅子頭（権現様）が祀られている。

そのあらずじは以下のとおりで、お伽草子「むらくも」⁽⁷⁾の系譜を引く。

親の菩提を弔うため経文を読誦していた男（村雲太夫）の前に、一人の若い美女が現れて妻にしてくれという。男は頑なに断るが再三の願いに折れて夫婦となる。男は極貧で年も越せなかった。女は麻糸で蚊帳を織った。男はそれを持って市場で出かけた。すると身分の高い僧侶が現われて

また「お伽草子」の作品が、古浄瑠璃風に語られていた例もある。その一つ。久慈の久保田家文書の中にある写本『家條（蚊帳）の本地』⁽⁶⁾の存在である。久保田家はかつて藩の祈願所の一つ・諏訪明神の別当職を担っていた。現在も祭壇には慶長十三年

莫大な値段をつけて買っていった。その蚊帳には法華經の經文が織り込まれてあった。女は実は十羅刹女じゅうらせつにょであった。

原本「むらくも」は一冊、東京大学に所蔵されるだけ。奈良絵本として寛文頃の写されたと考えられ、表紙が欠落していたので、登場する男「むらくも」に因んで仮題が付与されている。奥節写本の存在によって、本来の題名が『蚊帳の本地』ではないかと推される。奥書には「文政六年未ノ卯月吉祥日 奥州南部九戸郡久慈下長内窪田村致通 此主」と記され、近世後期の写本であるが、詞章も奈良絵本と比較して詳細かつ秀麗である。

このように、この地方では近世年間も記憶力絶倫のボサマ達によって古浄瑠璃が語り継がれた。これに対して三都（江戸・大坂・京都）では人氣がなくなると上演されなくなり、正本すらも忘れ去られる運命が待っていた。さらに近代に入ると、正本までも海外に流失したのもあった。古浄瑠璃『阿部鬼若丸』⁽⁸⁾がその一例である。若い頃の安倍貞任を主人公にした作品で、他の文献により正本の存在は分かっていたが、肝心の正本は日本では見つからなかった。それが昭和五〇年代イギリスのとある大学の図書館の蔵書の中から発見され、再び日の目を浴びることになった。

奥浄瑠璃はボサマの語りであって人形操りは伴わない。本来盲僧は「平家物語」などを琵琶を弾きつつ語っていた。芭

蕉は『をくのほそ道』に、盲法師は琵琶をならして奥浄瑠璃を語ったと記しているが、古雅趣向の芭蕉ゆえにまたまた疑念が無いわけではない。しかし東北地方の盲僧たちも、近世に入っても琵琶を弾き語っていた。盛岡藩では盲僧の役儀として藩主やその家族の治病祈禱に共同祈願をし、また、葬儀回忌法要等に多数の盲僧が列座するを通例としていた。盛岡藩家老日記『雑書』⁽⁹⁾によると、慶安五年（一六五二）藩主利直の実母慈照院の十三回忌法要に座頭五十八人が列席し、承応二年（一六五三）藩主重信しげのぶの病氣平癒祈願に座頭五十一人が新城観音に通夜祈願して、平癒の折は琵琶一面の奉納を誓願している。また、寛文三年（一六六三）八月利直の正室源秀院の葬儀法要には座頭が五十八人列して諷経を誦誦し、儀都なる盲僧が琵琶平家を語っている。少なくともこの平曲の伝統は盲僧たちに引き継がれていた。

『九戸軍記』⁽¹⁰⁾（岩手県立図書館蔵）には、「明暦二年（一六五六）」の序文が記されている。この頃出来上がったと目される。その内容から推して『平家物語』の影響を色濃く受けて成立している。その作成には、その頃福岡（現在の二戸市）にあった浄土宗名越派の光台寺こうたいじの僧侶や、そこに寄寓して盲僧たち、さらには利直の正室が出た蒲生家や南部家の人々の深い関与があって成立したものと考えられる。後日、光台寺は城下の移転とともに盛岡に移り、正室源秀院もそこに葬られ、その葬儀では琵琶平家が語られた。喜多村信節のぶよの表した『嬉遊笑覧』⁽¹⁰⁾巻六上の

「仙台浄るり」の条では「其処にはお国上るりと云ふ、是即仙台上るりなり、三線に合せかたる。」と記す。天明八年（一七八八）宮古藤原の座頭たちは紙張り三味線の弾き語っていた様子が『菅江真澄日記』には記されている。この頃の盲僧たちは琵琶は弾かないまでも、奥浄瑠璃を語るときは三味線を使用していた。修験・神子の場合には基本的には素語りで、太鼓や梓弓・珠数などを時折り使用していた。

『遠山家日記』には、法事の席で「奥節」をかたった記事がみえ、また藩記録にも鳴物停止の時でも「法事に招かれてしのび／＼に語ることは許す」とみえる。この時の演目は説経浄瑠璃系の演目を中心であったと考えられる。『かるかや』『阿弥陀本地（法蔵比丘）』『熊谷先陣論』などが語れたのではあるまいか。今日も各地の旧家に写本として残されている。

奥節の基層

以上、室町時代に起源をもつ古浄瑠璃がボサマ達によって、近世年間も語り継がれていた様相を八戸藩を中心にしてみた。一方、城下では新しい浄瑠璃や芝居・講談などの芸能も盛んに興行され、人気を博していたことも『遠山家日記』からも覗えた。三都などと異なり、新旧の芸能文化が共存する土壤があったと言えよう。この土壤（歴史・文化的背景）についても、一つだけふれて置こう。

馬事文化 源平合戦において活躍した「生接」は七戸立（産）、

「磨墨」は三戸立、「権太栗毛」は一戸立、「西楼」は三戸立と、糠部地方は平安時代からの名馬の産地であった。室町時代の記録『看聞日記』^{〔1〕} 応永二十五年（一四一八）八月十日の条には「関東大名の南部上洛す、馬百疋・金千両室町殿へ献ずと云々」と見える。南部氏が京都に上り、將軍足利義持に馬百匹・金千両という莫大な進物を献上したことを、時の天皇の父親である伏見宮貞成親王が度肝を抜かれたように記している。

近世に入っても馬の一大産地であることに変わりなく、『八戸藩日記』（目付所日記）延享二年七月十六日の条に、領内で一万八六二五頭が飼育されていたと記している。領民約六万人であるので、三人で馬一頭を飼育したことになる。江戸幕府も「公儀馬買」と称して、名馬を買いもとめて来ている。明治時代に入っても「軍馬育成地」として名声を博し、昭和前期まで続いていた。

古来馬は神の乗り物と考えられ、牧官（養馬の術を担う人々）は高度な技術と天界に通じる信仰の業を要した。みちのくの牧官たちも営々として養馬の技術を磨き伝えると共に、馬に関する信仰や「馬屋祭り」「オシラ遊び」「馬づくり」などの習俗を継承していった。前者は牧に所属していた牧士や伯耆（馬医師）、後者は博士（陰陽師系修験）や巫女（神子）によって管掌されていた。これらは近世に入っても引き継がれていた。正月三日八戸城に登城して「春田打ち」を舞う典屋松太夫は、文政元年四月十四日に遠山家の依頼で馬屋祈禱を行っていた。彼

も本来牧官につながる職能者であった。

「オシラ祭文」は、わが国の二系統ある養蚕神話の一つである祭文のなかで、長者に授けられた蚕が成長し、やがて繭から糸を紡ぐ様子や黒駒が天空を翔け巡る様が、にぎにぎしくかつ華麗に語られる、その末尾の高揚感の中で、神々が神子に降り下つて託宣がその場の人々に語られる。この語り物は、宮中の馬寮や牧に所屬していた巫覡（陰陽師・梓巫女も含む）の中で中世に創出された本地（由来）譚である。（福田晃氏説）¹²

昭和四十四年春、故小井川潤次郎氏が八戸市二十六日町根城すゑ巫女から採録した『オシラ祭文』（「まんのふ長者物語」）が残されている。この語りは訛りがあるものの詞章がとても美しい。語りは「抑々しらあの御本地、精しく読み上げ奉る、昔まんのう長者とて有り、かの長者こそ姫君一人持たせ給ふ、一人姫のことなれば、昼は管弦の座敷、夜は貝香に遊び、圍繞渴仰限りなし、然るにまんのう長者の御廐に、せんだん栗毛、一の名馬とて繋がせ給ふ」という語りで始まる。

やがて、姫の昇天の場面は「天の羽衣乞ひ降ろし、乞ひば程無く天の羽衣舞ひくだり、かいぐるみ、西より黒雲立ち、風にまかせて西天竺へと昇らせ給ふ」と。蚕が降り下る場面は、「神風吹いて、和やかに五色の雲棚引くにぞ、五色の雲に打ち連れ、姫の玉手箱は舞ひ下り、蓋を押し開き御覧すれば、白紙一枚錦に包み、急ぎ開いて見玉ふに、まことに白き虫黒き虫」と。

また馬の最期は次のように語られる。「長者は畜類の身と

して我が姫を（中略）怒らせ給ふ、性ある名馬のことなれば、梅檀栗毛は北に向つて三度いななき、前膝折つて舌を咬い切りねぶりける」と、舎人たちよる屠殺光景は語られない。この場面は幸若舞「八島」と同じである。八嶋合戦で身替りとなって死んだ佐藤嗣信に、義経が嗣信が生前から欲しがっていた名馬太夫黒を手向けようと墓の周り引き廻すと、「馬は北のものなれば、北風に嘶ひて、白泡囓うで、つひに空しく成りにけり」という場面である。勿論この詞章の原拠は『文選』古詩十九首の「胡馬依北風、越鳥巢南枝」である。梅檀栗毛の姿は「米」と言ひし文字七流、耳を申せば法華經二本立てたが如くなり、眼は日月の如くなり、爪を申せば天目伏した如くに、尾と申せや白糸の瀧よりかけたる如くなり、かほど美しき名馬もさらに無し、人間の身にならば一夜の契り込めべきぞ」と語る。「米」とは菩薩の異名で、『熊野本地絵巻』にも「御額によねといふ文字が三つ並びて候」とみえ、瑞相を表現した詞章である。また、幸若舞曲『馬揃』の「爪は厚ふて筒高し」、同じく『馬揃』の「尾は三重の滝の落つるが如くなり」や、説経浄瑠璃『をぐり』「尾は三条の滝の水がたぎりにたぎつて、たうくと落ちるが如くなり」の表現を承けた詞章である。

とくにも「爪を申せば天目伏した如く」は絶品なる文言である。室町時代の南部家文書のなかに「永玉文書」がある。僧・永玉を仲介して南部家が幕府管領との間で、互いに馬と天目茶碗を入手しようと交渉した様子を記した文書である。幕府管領

から「馬のほんと被仰候馬を、一見申度候由被仰候、誠に／＼
白鹿毛のことハ御床敷出、日々ニ被仰出候」との書状が届くと、
これに対して南部家は、天目一式所望する旨を、永玉を通じ打
診したことが、「天目同台事、御所望之由物語申候之処（後略）」
との書状から視える。このような馬事文化の豊饒さがこの詞章
には凝縮されている。以上が奥節を支えた基層の一例である。

このように彼らは中世以来の語り物を堅持し、近世前期の古
浄瑠璃（説経節・金平節など）を自家薬籠中の物と取り入れつ
つ、この地方の歴史や文化を踏まえた語り物をも創出していた。

*本発表に際しては、前八戸市立図書館長の藤田俊雄氏から、多
大のご教示やらご協力を賜りました。明記して深くお礼を申し上げ
ます。

註

- (1) 八戸市立図書館蔵。
- (2) 八戸市立図書館蔵。
- (3) 『若月保治浄瑠璃著作集』③（クレス出版・一九九八年）所
収。
- (4) 『古浄瑠璃正本集』（角川書店）所収。
- (5) 八戸市立図書館蔵。
- (6) 阿部幹男「家條の本地（翻刻）」自家出版。
- (7) 『お伽草子事典』（徳田和夫編・東京堂出版・2002年）

むらくも

【分類】 異類婚姻譚、発心譚

【梗概】 近江国信楽の住人むらくもは四十余年の女人不犯
の願を立て、奥山に隠遁し、毎日法華経転読を勤めていた。
しかし、二五年にあたる年、訪れた女に宿を貸し、その禁
を破ってします。その後、むらくもは、女の織り出す機織
物を京で売り、たちまち富貴の家として栄える。三年が過
ぎ、女は自らを十羅刹女の化身であると告げ、法華経転読
の功德によるものと論じ、消え去る。むらくもは、いつそ
う信心をかため、慈悲を施し、ますます栄えた。

【内容】 異類の女による機織りなど、昔話「鶴女房」のよ
うな異類婚姻譚のモチーフを想起させる。お伽草子「蛤の
草紙」においても、蛤から現れた美しい女の機織物を市に
売りに行き、富み栄えるという展開をなしている。そこで
も女は観音の使いであったとされ、仏教色の強いものとな
っている点においても共通しているのだが、ここでは男
の孝行によるものとしており、法華経転読の功德を説く本
作とは異なっている。また、女人不犯の願を破るものの、
それが結果的に発心へと繋がっていく点についても、『日
本霊異記』などに、菩薩が仏道に導き入れるために魅力的
な女性の姿となって現われたという説話が見られ、古くか
らある説話のモチーフにより成り立ったといえる。

【成立期】 室町後期から近世初期か。

【グループ】 蛤の草紙

【主要伝本】 無題の奈良絵本（東京大学国文学研究室蔵）。

寛文から元禄頃の写本で、表紙を欠、外題、内題ともないが、挿し絵の裏面に「むらくも」とあり、内容と併せられ、市古貞次によって「むらくも」と仮題された。

【翻刻・影印】 市古貞次「むらくも（翻刻・解題）」（『国文白百合』1、昭45年）。「大成」13。（恋田知子）

（8） 安田富貴子『古浄瑠璃』（八木書店・一九九八年）所収。

（9） 盛岡歴史ふるさと館蔵。

（10） 『嬉遊笑覧』（成光館出版部・昭和七年）。

（11） 『看聞日記』（明治書院・二〇〇二年）。

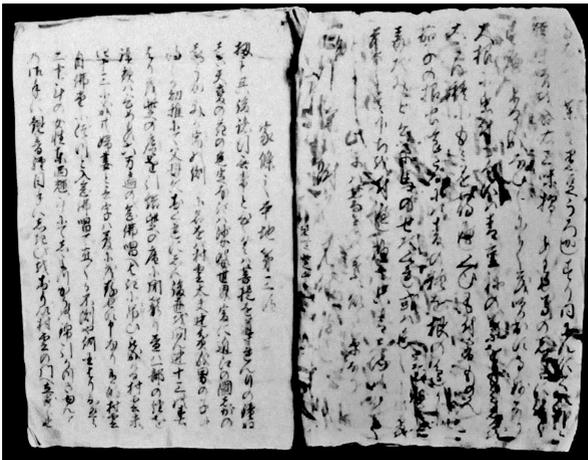
（12） 福田晃『馬の家』物語の系譜―〈田村語り〉をめぐって』

（『立命館文学』・昭和六〇年）

（13） 『幸若舞曲研究』全十巻（三弥井書店）。

附 『家條之本地』冒頭部

扱も其後、諸行無常とひ、ぐハ菩提を導くれんりの鐘ね、しき天変の花の色、定なきハ娑婆世界、爰に近江の國しがのしやう、かゞみが宿の側らに、名をバ村雲太夫迎貧成男の子候得しが、幼稚にて父母におくれ、にしん後世を問ん迎、拾さんの春よりも柴の庵を引結び、柴の庵に閉籠、昼は一部の経を読み、夜ハひめもす六万遍の念佛を唱へ、よぎに申ひける、村雲未四十三に成共、妻と言字ハ夢にも存



（『家條之本地』冒頭部）

ぜず申なり、有時村雲自佛堂にづつと入り、念佛唱へて在
くか、不測や何国より成は、二十斗の女性、東西輝斗に
て、しよつかうの錦を（後略）

（あべ・みきお／日本口承文芸学会会員）